

2021年11月

## 今月の新着図書から

『源氏物語』（一）～（九）柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井

貞和・今西祐一郎校注（岩波文庫，2017年～2021年）

高等科図書主任

林 知宏

岩波文庫からは、長らく山岸徳平校注の『源氏物語』が出版されていた。この度、新たな（新日本古典文学大系に基づく）文庫版が刊行され、この9月に完結した。日本の古典文学の最高峰と誰もが考える作品がハンディな形で提供されたことは何より喜ばしい。

『源氏物語』は現代語訳も多くあり、近年では角田光代のものが一定の評判を呼んだ。だが、やはりこの物語を原文で読むに越したことはない。ただ私も平安文学の初心者である。この『源氏物語』の本文は他の古典作品に比べて、ひととき難しいと感じる。高校生の頃、日本の古典文法に関心が持てず、あまり熱心に勉強しなかった。そのことが今更ながら悔やまれる。ただ、この作品を読んで味わうために必要な予備知識を揃えるためならば、文法などの勉強にも十分な動機づけができるだろうと現在は思う。

私は一度、この『源氏物語』を通読したことがある。ただし、それは別の版（阿部・秋山・今井・鈴木校注・訳『新編日本古典文学全集』20～25（小学館））によってである。頭注・本文・現代語訳の3段組みで頁が構成されており、情報量が豊かである。その点で素人には大変助かる。ただその分、視線が一つの頁の中で垂直方向に上下することが多かった。水平方向にはなかなか移動せず新たな頁に進むのに時間がかかった。結局、読了するのに3年近く要した。けれども充実した読書体験であった。今回の岩波文庫版は、現代語訳はないものの、十分な注釈がありストーリーを追うことに支障はないだろう。何より電車の中で『源氏物語』を読むことができるのは大きなメリットと思う。

『源氏物語』五十四帖の中で、前半部は、光源氏の栄耀栄華が言葉を尽くして称賛される。その分、個人的には主人公への感情移入がしづらかった。興味深さが俄然増してきたのは、「若菜」上下巻（本文庫版で第五巻）のあたりからである。源氏の最愛の妻、紫の上が病に倒れる。彼女を失う恐れに源氏は狼狽し、延命に必死になる。それと同時進行で別の妻（皇女である）女三宮の柏木との密通が発覚し、苦悩する。前半の輝く光源氏はここでは衰えを隠せず、因果応報を思い知らされる。老いへと向う源氏を作者は冷徹に突き放して描いているように見える。人生における上昇と下降の対比が私には面白く感じた。物語の中で源氏の死は描かれずに、その不義の子、薫を主人公にした宇治十帖へと移行する。なお第六巻の（今西祐一郎による）解説「光源氏の死はなぜ書かれなかったのか」は参考になった。これを機会に日本が誇る宝である古典に接してみてもどうだろうか。